

---

# 面影

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

面影

### 【Zマーク】

Z8399F

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

入学式ではじめて見てからその女の子が好きになった。けれど彼女をどうして気に入ったのか。そのことに気付いたけれど。男の子の立場から書いた恋愛ものです。

## 面影

好きになつたのは、本当に単純な理由からだつた。  
「可愛いな」

こう思つた。本当にそれだけだつた。

その娘高見純は唇が赤く大きく目がはつきりとして大きい一重だつた。黒い髪は長く肌はきめ細かく和紙の様な色だつた。性格も明るくクラスでもよく目立つ美人だつた。

若村智哉が彼女に声をかけたのはそんな彼女が可愛いと思つたからだ。その声のかけ方も彼自身が考へてもかなり自然であつさりしたものだつた。

「今日の放課後さ」

「あつ、確か」

「若村だよ」

明るく笑つて彼女に名乗つた。ここでもはじめて声をかけたとは思えない程あつさりとした調子で彼女に答えられたのが自分では不思議であつた。

「若村智哉つていうんだ」

「若村君ね」

「ああ。同じクラスのね」

まだ四月の中旬だ。だからクラスメイト全員の顔を覚えているわけではなかつたのだ。これは智哉にしろそうだしどうやら純にしろそうであるようだつた。

「確かにそうだつたわよね」

「そうそう。知つてる?」

「悪いけれど知らなかつたわ」

純は明るい調子で彼に言葉を返してきつた。

「そうだつたの。同じクラスだつたの」

「ああ。それでさ」

知られていなかつたのには少し落ち込んだがすぐに立ち直つてまた彼女に声をかけた。

「今日の放課後時間あるかな」

「まあ一応は」

純は少し考えてから智哉に答えた。この時彼はちらりと純の全身を見回した。赤いブレザーと黒いスカート、ネクタイのその制服はかなり派手でスカートも短い。どうやらスカートは女の子がめいめい上に織り込んでいるようだつた。そのせいでかなり目立つ格好になつていてその短いスカートから見える純の脚も制服から浮き出でいるスタイルもかなり見事なものだつた。それが智哉の青い詰襟とコントラストを為していた。

「あるけれど」

「それだつたらさ」

彼は時間があると聞いて一気に攻勢に出た。

「面白い場所があるんだけれど一緒に行かない？」

「面白い場所？」

「うん。駅前ね」

純が興味を示したのを見てさらに攻勢を強めた。

「ハンバーガーショップだけれど」

「ああ、あそこね」

そこのこととは純も知つてゐるよつだつた。

「あそこがどうかしたの？」

「あそこ凄く安くてしかも美味いんだよ」  
にこりと笑つて純に言つのだつた。

「だからさ。一緒にどう？」

「そんなんに美味しいの」

「しかも量もかなり多いんだよ」  
話を聞く限りいい」と呟くめの店だ。

「どうかな。それで」

「そうね。一つ聞いていい?」

「何?」

「そのお店、ダブルチーズバーガーあるかしら?」

「彼女が聞いてきたのはこれであつた。」

「ダブルチーズバーガー。どうかしら?」

「ああ、あるよ」

智哉はすぐに答えた。これについては彼はよく知っていた。何故ならそのダブルチーズバーガーを食べたことがあるからである。

「美味しいよ、それもかなりね」

「そうなの。あるの」

「ダブルチーズバーガー大好きなんだ」

これは本当のことだ。実は智哉はハンバーガーの中でダブルチ

ーズバーガーが一番のお気に入りなのだ。これは昔からである。

「だから。真っ先にチェックしたよ」

「そうなの。それだつたら」

「行くんだね」

「ええと」

だがここで純は少し返答に時間を置いてきたのだった。

「若村君だつたわよね」

「うん、そうだよ」

その時間を置いた理由は彼の名前を思い出していたからであつた。

「若村智哉。覚えておいて」

「わかつたわ。それで若村君」

「うん」

にこりと笑つて純に応える。

「何かな」

「そのお店。一緒に行つていいかしら」

「だから誘つてるんだけれど」

「そうよね。それだつたら」

「二人でダブルチーズバーガー食べようよ」

「そうね。じゃあ一緒にね」

話が決まった。ダブルチーズバーが決め手となつたのだった。こうして智哉は純を誘い出すことに無事成功したのであつた。

「行こうね」「ダブルチーズバーガーに」  
ここで純はさらに言うのだった。顔は満面の笑顔になつていてる。  
「飲み物はコーラね」「コーラもちゃんとあるよ」「いいわね。その二つがないとハンバーガーじゃないわ」「ハンバーガーじゃないんだ」「私はそう思うわ」「ふうん、そうなんだ」  
智哉は今の純の話を聞いて何故かデジヤヴューを感じた。しかし  
どうしてそれを感じたのかはぼんやりとでもありわからないのであ  
つた。  
「まあそうだよね」「じゃあ放課後にね。待ち合わせは」「学校の門の前でね」「そこでね。遅れたら駄目よ」「遅れないよ、絶対にね」  
自分から誘つて遅れるわけにはいかなかつた。この辺りは眞面目  
に考えている智哉であつた。  
何はともあれこれがはじまりだつた。智哉は純と付き合つだした。  
周りからは早いうちに可愛い娘をゲットしたとあれこれ言われるこ  
とになつた。  
「おいおい、やるじゃねえか」「御前意外と手が早いんだな」「早いって何なんだよ」  
この時彼は男友達と一緒に昼食を食べていた。食べているのはそ  
れぞれの弁当である。

「だつてよ。純ちゃんつて最初から人気だつたんだぜ」

「そうだな。奇麗だよな」

「奇麗だしな」

「智哉もそれは認める。

「性格も明るいしな」

「ちょっと騒がしいけれどな

「悪い娘じゃないよな

「ああ、確かにな」

「それもまた認める智哉だつた。

「一緒にいて楽しいな。いつもな

「余計に羨ましいな、おい」

「そんな彼女が一緒かよ」

「ただな」

「だがここで彼は言つのだつた。

「どうも引っ掛かるものもあるんだよな」

「引っ掛けるもの?」

「あいつダブルチーズバーが好きなんだ」「まず言つのはこれであつた。

「それとコーラがな」

「ああ、駅前のハンバーガーショップな

「あそこのだよな」

「それとラーメンは豚骨」

「彼は純のラーメンの好みも述べた。

「うどんは鳥なんばだな」

「うどんもか」

「お菓子はドーナツが好きだしな」

「なあどの店も駅前にあるのである。

「お好み焼きは大阪が最上だ。こんなところだ

「随分と二人で食べ歩いているんだな」

「それもかなりな」

「否定はしないさ」

友人達の今の突つ込みはあえて正面から受け止めたのだった。

「何かデートつていえば一人で食べているしな」

「けれどデートはもうしているのか」

「一応はな。ただな」

しかし智哉の顔に微かに困ったものが混ざったのだった。

「仲は進んでいるけれどな。キスはまだなんだよな」

「ははは、そりやそうだ」

「そう簡単にそこまで行くか」

これは友人達にすぐに笑い飛ばされてしまった。

「キスつていつてもそう簡単にはいけないさ」

「ましてやベッドまではな」

「簡単じゃないか」

実はこうしたことには疎い智哉であった。だから友人達が笑つたのをそのまま受けてしまったのである。顔も少し惚けた感じになっている。

「それは」

「当たり前だろ。まあ純ちゃんがどんな娘か知らないぜ」

「俺達は可愛いってだけしか知らないからな」

「ああ」

友人達はこう前置きしてきた。

「それでもな。大抵の女の子はな」

「ガードしてるんだよ」

「ガードか」

「高校一年だぜ」

友人の一人は学年についても言及した。今彼等は花の一年生というわけである。先輩からはこき使われるが初々しい年頃である。

「経験もまだどうしな」

「キスもか」

「だつて御前もまだだろ? キス」

「まつ、まあそれはな」

戸惑いつつこの質問に答えた。実はその通りだ。彼はキスもまだなのだ。

「まだだけれどよ」

「俺もだしな」

「俺もだ」

何とそれは友人達も同じであった。これには智哉も驚いた。それすぐにそのことを彼等に対しても突っ込むのであった。突っ込みにはいられなかつた。

「ちょっと待て、御前等もかよ」

「あんな、そうおいそれと中学生で経験してゐるか

「幾ら何でも早いだる」

「早いか

「中にはやつてる奴もいるだらうけれどな。最後までな

「それでもだ」

彼等の言葉はかなりの割合で自己弁護になつていていた。それでもえて言つのであつた。

「普通はないからな」

「俺達一応普通だしな」

「普通はか

「何度も言つが純ちゃんがどうかはわからぬいぜ」

「このことがまた話に出る。

「しかしな。普通はまだキスもまだだる」

「そしてはじめてはだ」

「このからの話は智哉もよくわかるものであった。

「誰でも警戒するよな」

「ああ」

だからすぐに頷くことができたのだった。

「そういうことだよ。だからまだなんだよ」

「それにだよ」

彼等はさらに智哉に言つてきた。

「付き合つてまだ一ヶ月かそこらか?三ヶ月か?」

「三ヶ月だよ」

流石に付き合つている本人だけあつてどれだけ経つたのかはきちんと把握していたのだった。

「四月に声かけてだからな」

「御前本当に手が早いな」

「とんでもない奴だ」

四月ということを再認識した一人の多少意地の悪い突込みが入つたがこれはほんの一瞬だった。

「まあそれはいいとしてだ

「いいのかよ」

「とりあえず今の話の本題じゃないからな」

「話戻すぜ」

いつも言つて彼等のベースで話を戻してきた。話しながらコーラを飲む。今彼等は街の自動販売機の前でそれぞれ「コーラを飲みながら話をしているのである。

「まあ三ヶ月だよな」

「ああ、そただれどな」

「それ位じゃキスまでは普通はいかないな」

「高校生だとな」

「そんなものか」

智哉は彼等の言葉を聞いて納得できたようなできなじょうな顔になつて首を傾げさせた。

「キスまで一時間胸まで五時間つて歌があつたけれどな

「随分古い歌だな」

友人は今の智哉の言葉に少し呆れた顔になつた。

「そりや遊び人の歌じやなかつたか？」

「確かそうだつたな」

彼も記憶を辿つてそれに頷いた。

「この歌は。確か」

「だつたら参考にはならないぜ」

「あとエロ漫画とかもだぜ」

友人達は「一ラ缶片手に話を続けていく。

「あんなの殆どじやなくて完全にファンタジーだからな」

「歌にしろそうだぜ」

歌についてまた言われた。

「そろそろ上手くいかないぞ」

「それはつきりとわかつておけよ

「漫画や小説もか」

「当たり前だろ」

「本物は創作とは違うんだよ」

これがさらに強調される。智哉は一人の話を聞いて今まで自分が抱いていた恋愛に関する考えがかなり幻想的なものだと思い知らされたのであつた。そしてそれは顔にも声にも出てしまつていた。

「ううむ」

「呻くな呻くな」

「別にそんな必要はないからな」

そしてこれもすぐに一人に突つ込まれたのだった。

「現実は甘くないってことだ」

「そういうことだよ」

「そう考えればいいんだな」

「ああ、そうさ」

「わかつたら焦るな」

今度は焦るなと言われた。釘を刺すようにだ。

「いいな。絶対にだ」

「まずこの三ヶ月順調だったと思つんだな」

「順調か」

「だつてあれだぜ」

「なあ」

二人は顔を見合わせそのうえで彼に言つてきた。

「コクつてオッケーだつたんだろ、最初は」

「ああ」

その通りだつた。まず最初の滑り出しへ上々だつたのだ。

「それから何度もデーターしてゐよな」

「食つてばかりだけれどな」

「食べば食う程いいんだよ」

「実際のところはな」

キスもまだだといふのにやけに詳しい一人であつた。何故かはわからないが。

「三ヶ月もたないカツプルだつているんだぜ」「それを考えたらな」「そういうものか」「それ考えたら順調だよ」「全くだ」

友人達の言葉に今度は羨望が入つた。

「いいよな、あんな奇麗な娘と付き合えて」「それも順調にな」「何か俺が幸せみたいな言い方だな」

今の中哉の言葉は自爆だつた。しかもかなりの。「馬鹿、幸せじゃなくて何なんだよ」「御前ちょっとは自分を振り返れ」

早速友人達から怒りの言葉が来た。そしてそれはヒートアップするものだつた。

「あんな。そもそもあんな奇麗な娘な」「しかも性格は明るくて中々いいし」「俺言われっぱなしだな」「じゃあ殴ろうか?」「悪いが容赦はしないぞ」

言葉は半分は本気だつた。羨望がやつかみになりそれがさらに妬みに変わろうとしていた。流石の中哉もそれを見て流石に言葉を止めたのだった。

「そうだな。それはな」「わかれればいいんだよ」「わからねえと容赦しねえ」

当然今の二人の言葉も羨望から来るものである。

「しかし。確かに奇麗な娘だけれどな」

「どうしてまた

「今度は何だ？」

友人達に問い合わせ返す。

「言葉の調子が変わってきたみたいだけれどな

「うちのクラス可愛い娘多いよな」

「学校全体がな」

かなり羨ましい学校である。美人が多いといふことはそれだけで幸福な場所にいるということだ。そうした意味で彼等はかなり幸せであると言える。

「とにかくだ。それでも何である娘なんだ？」

「奇麗だからか？やつぱり」

「まあそうだけれどな」

言われてそれに頷くのだった。だがまだ言葉はあった。

「ただ。何かな

「何か？」

「どうかで見たようなな。気がしたかな」

田を上にやつてそのことを考えるのだった。

「どういうわけかわからないけれどな」

「どうかで見たような？」

「ああ、何となくな」

また彼等に對して答えた。

「そんな気がするんだよ。今氣付いた」

「今氣付いたつてお」

「あの娘に感じるところがあつたのか」

「その感じるところに従つたつてどこか？」

自分で自分に問い合わせながらの言葉だった。

「あの娘にコクつたのはな」

「どうかで見たようなか」

「それって何なんだよ」

「いや、俺にもわからないんだけれどな」

今のはこのうへて答へるしかなかつた。それしかなかつた。

「そこんところはな」

「言つてゐる意味がわからねえぞ」

「御前何が言いたいんだよ」

また友人達の突込みが彼に炸裂した。しかしそれでも彼はわからないといった顔であつた。

「御前がわからないで誰がわかるんだよ」

「いい加減だな、おい」

「ダブルチーズバーガーにしろ豚骨ラーメンにしろな」  
話が食べ物のものに戻つた。

「どうかで聞いたよんな。そんな気がするんだよ」

「まあ御前にわからないのならな。俺達があれこれ言つてもな」

「仕方ないからな」

「そうだよな。とにかくな」

「頑張れ」

彼等の言葉はとりあえず智哉へのホールで終わつたのだった。

「俺達が言えることはそれだけだ」

「応援はするぞ」

「悪いな。しかしあの娘の食べ物にしろ」

友人達の応援を受けながら食べ物についての考えを続ける。

「何か引っ掛かるな。本当に何なんだろうな」

そのことも考えたがそれはすぐに忘れた。家に帰るとその日の夕食はラーメンだった。母親の手作りのラーメンであった。

「やっぱり豚骨なんだよなあ」

「悪い？」

目の前に出されたその白いスープのラーメンを見て、さうとすぐに母親が声をかけてきた。唇が赤く大きく目がはっきりとして大きい一重である。黒い髪は長く肌はきめ細かく和紙の様な色をしている。目の両端の皺が気にはなるがそれでも美人であると言える顔立ちであつた。この人が智哉の母親なのである。今でも彼の父は彼女を美人だともてはやしている。恋愛結婚で今でもその時の熱い気持ちはそのままの夫婦だ。

「豚骨で。カルシウムがあつて身体にいいのよ」

「それは何度も聞いてるよ」

「わかつたら早く食べるの」

母は少し厳しい声で智哉に言つてきた。テーブルにいるのは一人と智哉がそのまま歳を取つたよつた顔の父親がいる。ついでに母親そつくりの妹までいる。

「いいわね」

「わかつたよ。けれどお母さんつていつも豚骨だよね」「だつて美味しいじゃない」

今度の言葉はこうだつた。

「ラーメンつていえは豚骨。これじゃないと食べた気がしないわね」

「本当に好きなんだね。それにうどんは」

「鳥なんばだよね」

父親がここで言つた。席は智哉と向かい合つてている。

「お母さん的好みはね」

「そうよ。流石お父さん」

夫に言われて気分がよくなつたようだつた。やはり今でも熱い。

「わかつてくれるじゃない。私のことを」

「だつてお母さんのことだから」  
笑つて妻に応えていた。

「わかるよ。何でもな」

「うふふ。あとカレーはね」

「チキンカレーだね」

「それが一番よ」

この家ではチキンカレーばかりである。お母さんが料理を作る為そのメニューは自然とお母さんに決められるのだ。その結果家のカレーはいつもそれだ。

「美味しいし栄養もあるしね」

「ビーフカレーは？」

「あれもいいけれどね」

娘の言葉も否定はしない。否定しないだけだが。

「やつぱりカレーはチキンよ。本場インドだつてそうだし」「インドのカレーは日本のは違つひしけれど」

「智ちゃん、五月蠅い」

早速母親に注意される智哉であった。

「お母さんが本場と言つたら本場なのよ」

「やつだぞ、智哉」

しかもこれにお父さんが回諷するから始末が悪かった。お父さんはお母さんに「やつ」として家事のことなら何でも毎々諾々なのである。「お父さんの言ひ」とは聞かなくともいいからお母さんの言ひことは聞け。いいな

「普通逆なんじやないの？それつて」

田を纏めさせて逆にお父さんに聞き返す。

「お父さんの言ひ」とは聞けつてなるんじやないのか？」「やつ」の場合は

「何言ひいるのよお兄ちゃん」

新たに参戦してきたのはこれまでお母さんに生き写しの妹だった。

智哉にとつては非常に生意氣で小憎らしき、そんな妹である。

「ここの世で恐いものは何? 四つ挙げて」

「地震、雷、火事、お母さん」

「やうじう」と。わかつてゐるじゃない

「この家ではそうなのだった。

「だからお母さんの言ひとは聞かないといけないのよ。わかつた

？」

「だからラーメンは豚骨でうどんは鳥なんばでカレーはチキンなのが」

「そうこ「」とよ」

妹はしつれつとして答える。

「ハンバーグには上にバターを乗せてね。コーヒーはアメリカン」

「ついでに野球は阪神か」

「そう、全部決まつてるのよ」

「そりや俺も巨人は嫌いだ」

彼だけでなく一家全員アンチ巨人である。従つて新聞は読売ではない。

「あんなチームはどんどん惨めに負ける」

「これに関してはお母さんはあまり関係ないみたいね」

「巨人が負けることは日本にとつて非常にいいことだ」

実に正論であるがこのタイミングで言ひ言葉とはいひやせか言えないものだった。

「巨人が負けて喜ぶ人間がいる。喜べばそれだけ元気が出る」

「だから眞頑張れると」

「そうそう、そういうことだよ」

「こう妹に述べるのだった。

「わかつてゐるじゃないか」

「けれど野球は阪神にはつながらないんじゃないの?」

「勝つても負けても華がある」

やつと話がまた噛み合ひだしてきた。

「どんな鮮やかな勝ち方でもどんな惨めな負け方でも絵になる。そ

んなチームは阪神だけだろ!「？」

「その通り」

やつとお母さんが頷いてきたのだった。

「わかつてゐるじやない。偉いわ」

「これだけはお母さんに言われるまでもなかつたけれどな」

「けれど後は違うのね」

「ああ、食い物に關してはな」

また話が食べ物に戻つた。

「とにかくうちの家はそれで決まつてゐるんだな」

「やうそ、明日だけれど」

「こゝそといつタイミングでまたお母さんが言つてきた。

「明日はオムライスよ」

「おつ、いいね」

お父さんが最初に笑顔で声をあげた。

「それでオムライスはやつぱり御飯をカレーにしてそこから」

「やうよ、カレールーをかけてね」

「こゝりと笑つてお父さんに応えるお母さんだつた。

「それであさつてはそれでカレーよ」

「いいねえ、いつも通りのいい流れで」

お父さんは明日のオムライスと明後日のカレーのことを聞いても満足していた。どうやらその二つだけで充分の人らしい。

「カレーはチキンでね」

「それで行くわ」

「お兄ちゃんもそれでいいわよね」

「勿論」

こゝで声をかけてきた妹に對して答える智哉だつた。

「オムライスは特大でな」

「ええ、勿論よ」

最後にお母さんが笑顔で答えた。夜はいつもそんな話をしている。

この夜の次の日智哉は純と一緒に学校の食堂で昼食を探つていた。

智哉は鳥なんばうじんと親子丢を食べ純はオムライスを食べていた。  
見るべきは純がここで食べているオムライスであつた。しかも彼女  
はついでにハンバーグも食べている。かなりの量だつた。

そのオムライスとハンバーグを見て。智哉はあることに眞付いたのだった。

「あれっ、純ちゃんそのオムライス」

「んっ、どうしたの？」

オムライスを食べながら顔をあげてきた。寒はぎつと食べぐる」とに夢中なのだ。

「何があるの？」

「カレールーかけてあるんだ」

「そうよ、カレー オムライス」

料理の名前を智哉に答えた。

「ライスもドライカレーよ。そういうオムライスなのよ」

「うちと同じなんだ」

彼はそのことに気付いた。純の話を聞いて。

「それって」

「同じなの」

「うん、うちも実は今日オムライスなんだ」

「このことを純にも告げた。

「それで。うちのオムライスは」

「このカレーオムライスなのね」

「そう、そのままなんだよ」

「ここでハンバーグを見ると。これもまた。

「このハンバーグだつてね」

「ハンバーグも？」

「ほら、これ」

ハンバーグの中央を指差しつつ純に教える。

「これだよ。バター」

「バター？」

「うちの家じゃハンバーグにバターを乗せるんだ。そりやつて食べるんだよ」

「そりだつたの」

「そりすると美味しいじゃない」

にこりと笑つて純にまた言った。

「だから。そりやつて食べるんだ」

「智哉君の家でもそうなのね」

「純ちゃんもそりやつて食べるんだ」

「ええ」

今度はハンバーグを食べていた。奇麗にフォークとナイフを使いながら答える。

「そうよ。こりが一番美味しいから」

「成程ね」

「智哉君だつて」

今度は純が智哉に言つて来た。

「同じよ。私と」

「純ちゃんど同じつて?」

「今鳥なんば食べてるわよね」

「うん」

彼女が最初に指摘してきたのはまづはうどんだった。

「それに親子丼よね」

「こりの組み合わせがどうかしたの?」

「その組み合わせなのよ」

組み合わせのことをまた指摘するのだった。

「私も親子丼か鳥なんばを食べる時はね。いつもやうやつてるじやない」

「そりだつたんだ」

「天麩羅うどんの時は天丼」

天麩羅で揃えている。

「まあこれはあまり食べないけれどね」

「食べるのはやっぱり鳥なんばなんだ」「そういうこと。智哉君も同じなのね」

「鶏好きだから」

これが理由だつたがお母さん仕込みのは「」では内緒だつた。

「だからね」

「私も同じよ」

純はにこりと笑つて智哉にまた答えた。

「鶏好きなのよ」

「純ちゃんもなんだ」

「そう、それにカレーが」

今度はカレーだつた。「」これもまた智哉に「」とつては驚くべきことであつた。

「チキンカレーね、やっぱり」

「一緒だ」

思わず出でしまつた言葉である。

「そこまで。一緒になんだ」

「？ 一緒に？」

「うちの家と一緒に」

「うどんをすすりながら純に述べた。

「うちの家でもカレーはチキンカレーなんだよ」

「そうなの」

「しかもね」

話はさらに続く。

「買うハンバーガーはいつもダブルチキンバーガーで」

「そう、ハンバーガーはやっぱりそれね」

これはもう付き合いだして最初でわかつていたことだが。それが自分の家と全く同じだということには今はじめて気付いたのであつた。

「それが一番よ」

「そうそう」

「あとラーメンは

「豚骨よね」

「当たりだよ、うちもラーメンは豚骨」「これもわかつてたことだが同じだと気付いたのはやはり今がはじめてだった。

「これも同じなんだね」

「そうね。全部同じね」

「少なくとも食べ物はそうだね」

智哉はあらためてこのことを知り驚きを隠せなかつた。

「何でことなんだ」

「けれど何で同じなの?」

「うちのお袋の好みなんだ」

今はじめてこのことを純に教えた。

「うちの家じやさ。お袋が料理は全部取り仕切つてゐるから」

「それでなのね」

「最近じや妹も作つてゐるけれどね」

しかしであつた。

「あいつも。お袋と舌は同じだから」

「じゃあ全部一緒なのね」

「そう、料理は全部一緒」

このことも純に教えた。

「何もかも一緒さ」

「いいわね、それつて」

純はここまで話を聞いたうえでにこつと笑つて智哉に言つてきた。

「そんなに一緒だとね」

「いいのか? それつて

「だつて。全部私の好きな食べ物だし」

彼がまず言つのはここであつた。

「かなりいいわね。何でもそんなに好きなのを作つてゐるなんて」

「全部純ちゃんの好きなものだつたんだ」

「そうよ。全部ね」

それをまたにこりと笑つて告げた。

「全部好きよ。そこに名前が出たのはね」

「そういえば」

さうに氣付いた智哉であつた。

「ダブルチーズバーガーも豚骨ラーメンも」「ええ」

「どちらも純ちゃん大好きだし」「それはもう知ってるわよね」

「とつくに。お袋も大好きだし、特にラーメンは」「ラーメンは特に譲れないわ」「やはりこり来た。

「豚骨よ。これが一番よ」

「本当に同じなんだな。そつくり」

「だからそういうの聞いてると」

オムライスもハンバーグも殆ど食べ終えたところでもまた智哉に言つてきた。

「行つてみたくなつたわ」「行つてみたくなつた？」

「そう、智哉君のお家にね」

「こう切り出してきたのであつた。

「美味しいものばかりだから。だからよ」「それでなんだ」

「駄目かしら」

「あつ、いや」「あん、まあ」

言われる少し戸惑いを見せながら純に答えた。

「別にそれは。僕としては」

「いいのね」「いいのね」

少し戸惑いを見せながら純に答えた。

「僕はいいけれど」

「じゃあいいじゃない」「

純は無邪気な様子だったが智哉は違っていた。戸惑いをまだ顔に見せている。それでも純の言葉はほぼ一方的に続く。彼が言えないのは気にしていないようだ。

「今度の土曜日ね」

「土曜日に」

「ええ。空いてたわよね」

「まあね」

戸惑いを消せないまま純に答えるしかなかつた。完全に彼女のターンが続く。

「それはそうだけれど」

「じゃあ何の問題もなしつてことで」

これまた一方的に純に決められてしまつた。後でわかつたことだがこの強引をまでもが彼がよく知るある人と一緒なのであつた。

「これでね。いいわよね」

「まあいいけれど」

「さつ、今から楽しみね」

もう彼女の中では完全に決まつていた。強引に決めていた。

「智哉君のお家のお料理がね」

「うちのお袋の料理なんだけれど」

「一緒にじゃない」

何故彼が困つているのかにも気付いていなかつた。天真爛漫なま  
ま。

「家のお料理つてお母さんが作るものだから」

「何かもう」

言つても仕方ないようと思えた。もつこここまで思えるようになつたら觀念するしかなかつた。そして彼は觀念するのであつた。

「いいや。じゃあ土曜日ね」

「御願いね」

「お袋には言つておくから。じゃあね」

「ええ」

これで話が終わった。とりあえず母親に話をしたらこれがまた。随分と明るく返答を返してきたのだ。智哉がうんざりする程の明るさで。

「あら、いいじゃない」

「いいんだ」

「だつて。智ちゃんの彼女よ」

明るい笑顔でまずはこのことを告げた。

「悪くないのに決まってるじゃない。むしろ大歓迎よ」

「大歓迎なんだ」

「しかも私の御飯を食べたいっていつのね」

「そうだよ」

憮然として母親に答える。答えながらアメリカンを飲み続ける。

「だから来たいっていうんだ。お母さんの料理が美味しいそつだつてことで」

「見所があるわね」

今の中哉の報告で火が点いたようであった。ちらり。

「その娘。どうやら」

「見所があるんだ」

「私の料理は神様の料理よ」

勝手に自分でそういうことにしているのであった。かなり強引に。

「鉄人とも言うわね」

「今時料理の鉄人なんて言われてもね」

「けれどその通りだから何も言わないの」

やはり強引に話を纏めるお母さんであった。

「わかつたらいいわね。さて、と」

「土曜日作るんだ」

「スペゲティにしようかしら」

もうメニューの「」とまで考えだしていた。

「その日は。どうかしら  
別に」

つつけんじんに言葉を返す智哉であった。

「どうでもいいよ。とにかくいいんだね」

「だから。何度も言つけれど」

にこにこしたまま息子に言葉を返すのだった。

「私の料理が食べたいなんて見所のある娘、是非招待しないとね」

「わかつたよ。じゃあそういうことでね」

「あちらにも伝えておいて」

今度は純に自分の言葉を伝えるように智哉に告げた。

「是非共つてね。いいわね」

「わかつたよ。じゃあね」

「ええ。土曜日のお昼ね」

こうして時間まで決まった。そしてその土曜日まだ困った顔のままの智哉が駅前の本屋の前で純を待つている。そこに赤とえんじ色の赤系統で揃えた純がやつて來た。赤いパークーに下はえんじ色のロングスカートだ。靴下も赤で靴まで赤だ。首にかけてあるカーディガンはピンクでやはり赤系統で統一させていた。その彼女がやつて來たのであった。

「お待たせ」

「うん」

まずはその純の格好を見たのであった。顔もよくメイクされているが見れば口紅まで赤だった。本当に赤系統で何もかもを統一させていた。

あまりにも赤ばかりなのでつい。智哉は純に対して問うのであった。

「赤、そんなに好きだったつけ

「そうよ、赤好きだから」

相変わらずのにこりとした笑みで智哉に答えてきた。

「だからこことぞつていう時はいつも赤で揃えるのよ」

「そうだったんだ」

「智哉君は別にこだわらないのね」

「まあそれはね」

彼は青い上着に黒いズボンだ。これとこって統一はされていない普通の格好である。

「それに今日は僕の家だし」

「だからなのね」

「純ちゃんだつてそんなに気合入れる必要ないのに

「それが甘いのよ」

右手の親指をちちちちちつ、といった感じで動かして智哉に告げる。

「それがわかつていなのがね。まだまだ甘いわね  
甘いんだ」

「彼氏のお母さんとのこりに行く」

「まずはこのことを言ひつ。

「これだけでかなりの勝負なのよ」

「だからなんだ」

「そういうこと。わかつたわね」

「まあそりゃ言われると」

「ここでもやや純に強引に押される。

「そうなんだね」

「そうこりことよ。じゃあ」

こつして今回も純のペースで話が進む。

「こぞ智哉君のお家へ」

「結局行くんだ」

「勿論」

強引に純に押し切られて彼女を家に招くことになった。この段階

でも迷っていたのだがそれは無駄なことだった。程なくして純を家に連れて行くと。まずは玄関まで迎えに来たお母さんの格好に絶句した。

「何だよその格好」

「おかしい？」

「おかしいも何も」

玄関で純を横に立たせたまま抗議する。

「派手過ぎるだろ。真っ赤なんて」

「赤好きだから」

「理由になつてないよ」

見ればお母さんまで赤尽くしであった。スカーレットの上着に紅のズボン、エプロンは鮮やかなピンクでアリスリップも真っ赤だ。何処までも赤系統で統一されていた。見ていて目がチカチカする程だ。

「大体何でここで赤なわけ？」

「決まつてるでしょ。赤はお洒落な色なのよ」

「お洒落って」

話を聞いていて「デジャヴューを覚える智哉であった。

「話がわからないんだけれど」

「お客様が来られるじゃない。だから」

「お洒落したつてこと？」

「そうよ。これでわかつたわね」

「わかつたつて思う方がおかしいよ」

うんざりとしたような口調で言葉を返してみせた。

「全く。何かつて思えば」

「それで」

お母さんの方で話を打ち切つてきて別の話題にしてきた。

「この娘なのね。あんたの横にいるこの娘が」

「はい、智哉君のガールフレンドです」

純の方からにこにこと笑つて名乗り出たのであった。

「純といこます。宜しく御願いします」

「純ちゃんね。いい娘ね」

「いい娘かなあ」

「だつて服全部赤じやない」

お母さんが言つのはそこであった。今氣付いたがお母さんも純も服を赤で統一しているのだ。おかげで田がかなり疲れてしまつ。

「わかつてゐじやない。お洒落が

「そうですね。赤ですね」

純もまたにこにこと笑つてお母さんの言葉に応える。

「お洒落する時は

「そうこにじと。あんたにしては珍しくいい娘を選んだ」と

「俺が責められるのかよ」

「当たり前でしょ。あんた何時でもセンス悪いんだから

ボロクソに言われる智哉であった。しかも自分の家の玄関でお母

さんには。

「そのあんたがどうして。こんないい娘を選んだのよ」

「それはまあ

「智哉君の方から声をかけてきたんですよ」

またしても純がここぞといつタイミングで述べる。

「デートにも誘ってくれたし」「そうだったの。あんたがねえ」「何か疑わしいって目だな」

本当にお母さんは今智哉をそんな目で見ていた。何故か純に対するよりも彼に対する方がきついのが彼にとつては不思議だった。それに対して純には至つて優しい。優しいどころかまるで何年どころか生まられてから知つているような接し方なのであった。

「俺がそんなに」

「はい、話はここまで」

またしても強引に決められてしまった。

「あがりなさい。もうスペゲティできるから」

「あつ、スペゲティなんですか」

「そうよ。スペゲティにピザ」

ピザまであるといつ。智哉はこれは初耳だった。

「あるから。さあ早く」

「わかりました。じゃあ智哉君」

純の方から明るく誘つてきたのであつた。本当に何処までもお母さんとこの純のペースで話が進んでいつていた。

「あがりましょう」

「あがりましょうってここ俺の家なんだけれど」

「あれこれ言わない」

またお母さんの声が智哉にかかる。

「あがつて早く食べなさい。いいわね」

「わかつたよ。それじゃあ」

こうして自分の家なのに何故か肩身が狭くそのうえあれこれ言われながらあがる智哉であった。彼と純が向かい合つてテーブルに座るとすぐに。そのスペゲティとピザが置かれたのだった。

「あっ、このスペゲティって」

「どうかしら」

お母さんは声をあげる純の側に来て誇らしげに微笑んでみせた。

「ネー口。鳥賊のスミを使ったスペゲティ」

見ればスペゲティは真っ黒だった。さながらインクをかけたようである。そこにスライスしたトマトと鳥賊の切り身、それにガーリックがある。その三つを炒めてその上に鳥賊スミをかけて熱しそれから茹でたパスタにその鳥賊スミソースをかけたものである。

「これははじめてかしら」

「いえ」

だが「こ」で。純はまたしても満面の笑顔でお母さんに応えるのであつた。しかも同時にピザも見て「こ」る。ピザはベーコンと海老、それに貝を乗せたシーフードメインのピザである。お母さんの好きなスペゲティとピザはこの二つのなのである。

「私このスペゲティ好きなんです」

「ありつ」

「何と」

今純の言葉を聞いてお母さんも智哉も驚きの声をあげた。お母さんは喜びの声であり智哉は純粋に驚きの声であつた。これだけの違いが「こ」でもあつた。

「好きなの。このスペゲティが」

「家じゃいつもこれです」

この言葉を聞いてそれこそ顎が外れんばかりに驚く智哉であつた。まさかと思つたがスペゲティまで。偶然にしてはあまりにも出来過ぎであつた。

「ピザも。シーフードピザが好きで」

「やうだつたの」

「どちらもそのまま私の家でも食べます」

「まさかそれがここでも出るなんて。何て言えぱいいか」

「まさかそれがここでも出るなんて。何て言えぱいいか」

「じゃあどちらも食べられるわね」「はい！」

その満面の笑顔でお母さんに応える純であった。

「それで食べる前にはチーズとタバスコをかけて」

「それまで同じなのか」

智哉はさらに驚くことになった。顎が外れそうになるのを何とかするのに必死な程であった。

「何てこつた」

「いいわね。さらにいいわ」

その彼の目の前ではお母さんがこれまでになくにこにことしている。本当に嬉しくて仕方ないといった顔で純の隣に立っている。

「あんた、本当にいい娘を見つけてきたわね」

「いい娘つて・・・・・・んつ！？」

そしてここで気付いた。にこにこと笑う一人の顔を同時に目の中に入れて。何とそこにいるのはそつくりそのまま同じ顔をした二人だったのだ。こちらの方が親子ではないのかと思える程そつくりの顔が二つ彼の目の中にあつたのであった。

その二つの顔を見てわかつた。何故先程お母さんの赤い服を見てデジヤヴューを覚えたか。それに時々純を見て何か前に見たような気になつたのか。最初に何故純に声をかけたのか。全てがわかつたのだった。

（俺はマザコンだつたんだな）

心の中でもうこう呟いた。

（だからこの娘に声をかけたんだ）

そういうことだった。何から何までそつくりなこの娘に。そうだったのだ。それがわかつた彼は。どういうわけか心の奥底から笑えて仕方がなかつた。

「んつー? どうしたの智哉君」

「そんなに笑つて」

その二人が彼が笑つて いるのを見て 声をかけてきた。

「何があつたの?」

「おかしいの? 何か」

「いや、別に」

だが彼はその笑顔のまま 答えなかつたのだった。

「何もないよ」

「そう、何もないの」

「あからさまに何かありそうだけれど」

そのお互いそつくりな顔で彼に聞つのであつた。

「まあいいわ。じゃあ純ちゃん」

「はい」

「スペゲティとピザの次はね」

「ええ」

「デザートだけれど」

話は今度はデザートに移つていた。やはりこれは欠かせない。

「イタリア料理のデザートはわかるわね」

「ジェラートですね」

「そう、それよ」

にこにこと笑つて 純に告げる。

「それなのよ。そのジェラートはね」

「バニラですね」

「その通り。やっぱり一緒にね」

「本当に一緒にだな」

智哉は話を聞いてまた思つたのだつた。

「何處までも。親娘みたいだな」

「 もう冷やしてあるからね」

「 じゃあスペゲティとピザを食べ終えたひぐい」「元談抜き

「 紅茶も用意してあるから」

「 紅茶といえば」

「 ここから先ももう完全にわかつてしまつてゐる智哉であつた。彼は今の一人のやり取りから元談抜きで純は母親の血縁者ではないかと思つてゐた。

「 アイスティーで」

「 冷やしてあるから」

「 やはりこゝへ來た。

「 それとミルクでね」

「 そうですよね。やつぱり紅茶はそれですよね」

純はアイスミルクティーと聞いてまた顔を綻ばす。

「 アイスミルクティーですよね、やつぱり」

「 熱くてもミルクティーよね」

「 勿論ですよ」

「 やつぱりな」

やはり彼の予想通りなのであつた。紅茶も。

「 そつなつたか」

「 食べ終わつてからテレビ観ながら食べましょ」

「 テレビですか」

「 だつて。今日は」

「 ここでお母さんの顔が少し変わつた。食べ物とは別のものを楽しもつといつ顔であつた。

「 野球の試合があるから」

「 野球といえばやつぱり」

楽しみながら語る純であつた。その表情はやはりお母さんと同じものだ。よく見れば顔に皺があるなし程度の差で本当に同じ顔なのであつた。

「 阪神ですよね」

「そろそろ。野球は阪神」

野球まで同じなのだつた。

「やっぱりね。虎よね虎」

「虎が巨人を倒す」

阪神ファンの最高の喜びである。

「それが一番よね。純ちゃんもわかつてゐるじゃない」「何が史上最強打線ですか」

確かに滑稽な名前の打線である。荒唐無稽であると言つてもいい。そのわりにはつながりがなくホームランだけでアベレージヒッターの重要性を把握しておらず機動力は皆無だ。おまけに守備はお粗末でチームプレイも全く考慮していない。こうした打線を良識ある人間は史上最強などとは決して呼びはしない。強いて言うのならそれは『自称』最強打線である。実に滑稽であり愚劣な打線の名前であるがこれが世に出る不思議現象が起こすのも日本なのだ。

「全然駄目ですよね、あんなの」

「巨人は巨人よ」

お母さんの嫌いなものはまず巨人なのだ。

「センスなんてないのよ。名前にも」

「そうですね。それに対しても我が阪神は」

「ダイナマイト打線」

阪神タイガースというチームの代名詞である。終戦直後に名付けられた名前である。碌に食べ物もない時代に阪神は打ちまくつた。そしてこの名前は昭和六十年の優勝の時にも復活している。まさに阪神そのものといつてもいいのがこのダイナマイト打線という名前なのだ。

「あとJFK」

「いいネーミングですよね」

「巨人の偽物の打線なんかとは違うわ」

この言葉はその通りであつた。わからないのは卑しい顔立ちをして巨人ばかり褒めしゃもじを持つて喚き散らし人様の御飯を漁るだ

けの無芸大食の自称落語家だけである。世の中知能も人格も卑しいことこのつえない輩もいるということである。これもまた怪奇現象であろうか。

「あんなものとはね」

「阪神は打線が本当じやないですか？」

「流石ね」

今の言葉もお母さんの心の琴線に触れるものであった。

「そうよ、阪神の真髓は」

「ピッチャーですね」

これがわかつてゐるかわかつていいかで本当の阪神ファンかそうでないかがわかるという。阪神は伝統的にどんなチームかを。

「やっぱり」

「そう、ピッチャーよ」

お母さんの目が光つた。

「若林も小山もいたし」

「はい」

いきなりかなり古い。

「江夏村山」

「中継ぎ課」

不振期に阪神を支えた中次ぎ陣をこう呼んでいたのだ。どれだけ不振であつた時もピッチャーには滅多に困つてこなかつたのである。「そういうことよ。甲子園で憎き巨人を打ち負かす」

「阪神のピッチャーがですね」

「いいわねえ。純ちゃん」

純のことをさらに気に入つたようであった。笑みがせりて明るいものとなつていた。

「増え気に入つたわ。いいわ」

「有り難うございます」

「それじゃあ。丁度スペゲティもピザも食べ終わつたし」

どちらも量はかなりあつたがあつといつ間であつた。食べる量が多いのもまた一人は実によく似てゐるようであつた。

「それじゃあ。いよいよ」

「はい」

「ジエラートね」

「もう野球はじまつてますよね」

純は自分の腕時計を見た。左手にあるそれも赤くカラーリングされてゐる。時計の色までお母さんの時計と同じだつた。実は特別にカラーリングしているのだ。

「いえ、そろそろでしょつか」

「そうね、そろそろね」

お母さんも時計を見る。その動きまでもが一緒にあつた。

「はじまるわね」

「食器をなおして」

「ああ、いいわよ」

「純がなおそうとするのは止めた。」

「智哉にやられか？」「

「俺かよ」

「料理は女の子の仕事よ」

これはただ単にお母さんが料理好きだから言つていらるだけである。しかしこの家ではお母さんの言葉がそのまま法律になるからそういうつているのだった。

「だったら食器をなおすのは」

「男の仕事だつていうのか」

「いつも言つてるでしょ」

智哉に対してもつづけんどんむかしら

「このことは。違うかしら」

「それはそうだけれど」

「だつたら文句はないわね」

有無を言わせない口調であった。

「いつも通りだしね」

「まあね。それじゃあ」

「何か私の家と同じなんですかれど」

「ここの純はまた言うのであった。

「男の人が食器をなおすのつて」

「これもそうなのね」

「はい、私の家はお父さんと弟ですけれど」

何處となく智哉の家と似ていると彼は思った。妹が弟になつただけ。つまり男女の兄弟順が入れ替わつただけなのである。

「それでも。そこは」

「ついでに洗うのもね」

「はい、そうです」

「これで何度もわからぬがこれまた同じなのであつた。

「お父さんと弟の仕事なんです、うちは」

「うちもよ。その通りよね」

お母さんの満面の笑みは続く。それと共に言葉もあつた。

「女が料理をしたら男が食器を洗う」

「その通りです」

「昔は男子厨房に入らずつて言つたそうだけれどな」

智哉は一人に聞こえないようにポツリと言つた。思えば古臭い言葉であり最早死語であるがそれでもふと思いついたのである。この考えについては彼も古臭いえにそもそも根本から間違つてゐると思うがそれよりも一人のこのかなり勝手とも思える考えに困つていたのである。

「同じか」

続いてこう思つた。

「結局俺は、お母さんの若いのを選んだのかな」

苦笑いにもなつた。しかしそれでも何故かそれでもいいと思えるのだった。

「まあいいか」

それが言葉にも出たのだった。

「一緒に一緒で。それで」

あらためて一人の顔を見る。その顔はやはり。

「やっぱり奇麗で可愛いしな。もうそれでいいか」

何故純に声をかけたのかも彼女が好きなのかもわかつた。わかつて嫌になつたのではなくむしろ余計に純が好きになつた。そんな自分に苦笑いを浮かべつつ一人を見ているのだった。目の前で賑やかに話しながら同じ顔で笑い合い同じジェーラートを食べる一人を見て、彼も笑うのであった。

2  
0  
0  
8  
.  
8  
.  
1  
9

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8399f/>

---

面影

2010年10月8日15時36分発行